

[解 題]

ピエール・ブルデューの農民論について

須 田 文 明

ここで紹介する論文⁽¹⁾の筆者ピエール・ブルデューについては、すでに多くの著書が邦訳されていることもあり、もはや改めて紹介する必要はないであろう。また、この論文そのものについても、訳者自身、詳細に検討したことがある⁽²⁾。この論文の題名および副題に比べて、書かれた内容の方は、農民の「ヨメ不足」という、きわめて具体的なものである。そのために、表題と内容とのギャップに驚きを感じるかもしれない読者のために、あらかじめ表題について説明しておきたい。「禁じられた再生産」というのは、農民の未婚状態が、農家が次世代にわたって経営を維持していくことを困難にする、という事態を示している（したがって、集団としてみた場合、農民自身が再生産されないことになる）。また、娘が農民と結婚しないこと、あるいは、農家の若者自身の離農について、他の職業との所得格差や雇用機会と関連づけた、農業の低収益性の結果として論じられるのが常であるが、こうした経済的次元における、都市的世界への「吸引力」が働くのは、象徴的な次元を通じてである、というのが、副題の意味である。

ところで、すでにわが国においては、農家の「ヨメ不足」、それと関連した「外国人花ヨメ」といった話題が、一時期センセーショナルに取り上げられていた。農民の独身問題の深刻さ、という点では、フランスでも同様である。例えば、1989年8月23日付けの「ル・モンド」紙に、アルプス南西部、ドローム県の、人口100人ほどの三つの小村に、マダガスカルから1名、フィリピンから2名の外国人妻がやってきたという記事がある。一つの例を見てみよう。リュシアンは44歳、

ジゴール村の農民である。パリにある結婚紹介会社に以前から登録していた。最初は「フランス人女性を選んでいた」が、「フランス人女性たちは、『よい条件』を求めており、彼が、自分は農民だ、と書いてやると、もう返事がこなくなった」という。そこで、マダガスカルヨランドという小学校教師との2年半に及ぶ文通が始まることになる。彼女には前夫との間に10歳の息子がいるが、子供ともども、この村にやってきた。現在、夫は18頭の乳牛、羊の世話をし、ヨランドは、菜園、ウサギ、鶏の世話をしている。この新聞記事だけからは即断することはできないが、こうした現象は、「花ヨメの売買」といった形で取り上げられるというよりも、小さな村がコスモポリットになって行く、という意味で肯定的に捉えられているのが興味深い。例えば、フィリピンからは2名の外国人妻がやってきたと書いたが、二人目のフィリピン人女性には、一人目の女性の友人であり、彼女が隣村の独身男性を紹介したのが縁で結婚することになったという。

さて、ここに紹介するブルデューの論文は、1962年に同じく『農村研究』誌に掲載された記念碑的論文、「独身と農民の条件」と対をなしている（“Célibat et condition paysan”）。89年の論文でも指摘されているように、62年の論文では、すでに後のブルデュー社会学を導くことになる様々な観点が端緒的にはあれ垣間みえる。例えばハビトゥスという概念がここでも言及されている。しかしこれと関連して興味深いのは、農民と身体の関係について、一つの項目として論じられていることである。つまり、ある社会関係ないし規範の個人による内面化を考えようとす

る場合、われわれは、これを精神的な過程とみなしがちである。それに対しブルデューは、これを身体化として捉えたのである。彼の説明に耳を傾けよう。クリスマスのダンス・パーティーは、潜在的配偶者としての男女の出会いの典型的な機会なのであるが、農民は、地方に特徴的なダンスにしか合わせられず、都会風のダンスを前にしてぎこちない態度をとってしまうのである。つまり、独身農民が自らの存在条件について抱く知覚は、身体的行動と適合しており、結局のところ、この存在条件を実現するように行為することになるのである。

翻訳という形で紹介する以上、本論文の内容について詳細に論じることは避けるが、社会学的な争点の一つに言及しておくことは無用ではなかろう。つまり、この論文において、結婚市場という概念が、中心的なテーマとして現れながらも、曖昧な形で用いられているという印象を受ける。つまり、ここでは、それは何らかの財が他の財と交換されるというような、一般化された交換として理解されているのであるが、デスマッジョ等によれば、むしろ結婚市場という概念は、二人の潜在的配偶者同士が、文化的類似性に基づいて親密さを求める際の、組み合わせとして理解されるべきであるという⁽³⁾。

ここで、ブルデューによる、フランスの農村・農民研究について一言触れておきたい。ブルデュー自身の農民についての記述は、彼の多くの著作の中に散見されるが、農民論としてまとまったものとしては、上述の二つの論文の他に、「分類対象＝階級対象としての農民」⁽⁴⁾がある。以下、この論文を一瞥しておこう。もちろん、ブルデューの農民論と言っても、彼の社会哲学と分けて論じる訳には行かないので、少々迂遠ではあるが、後者についても触れざるを得ない。

まず、ブルデューにとっては、社会的世界とは、意志や表象としてある。換言すれば、

ある社会集団が、そのようにあり、あるいはそのように行為するのは、自らが抱く、あるいは他の諸集団が抱く表象のためなのである。ところで、こうした表象は所与のものの反映ではなく、「構成」の行為の所産である。こうして社会的現実の社会的構成は、無数の相対立する構成行為において実現される。そして、行為者は自らの利益に適した社会的世界の表象を押しつけるために、闘争しつつ、この構成を行うのである。社会的世界の表象を生産するにあたって、各行為者はその生産手段が異なり、したがって闘争は不平等なものとなる、という。

こうして、社会についてのブルジョワ的な表象が支配的なものとなる。世界についてのブルジョワ的な表象は、客観化された形式の下で、自然界や社会に対する理解の規範を押しつけるのである。このように、社会的なものの自然化、つまり社会的に構成された現象が、あたかも自然に発生した当然の現象であるかのように思われる事態が促進されることになる。ところで、支配的な集団が自身の知覚の基準を押しつけ、自分が自分について考えるように社会に対し知覚させることができるのは、彼らが、客観化の作業に直接貢献する人々（画家や作家、ジャーナリストなど）に対する権力を持ち、自分の客観化とイメージの生産とを管理できるからである。ブルデューは、ここに芸術作品の社会的機能を見る。つまり、それが提供すべきとされているものは、社会的世界について、中立的に喚起すること、そしてこの喚起は、あたかもそれが社会について語っていないかのように語ることなのである。

それに対し、社会的世界についての自分のイメージ、したがって自分の社会的アイデンティティの生産に至るまで支配された被支配的集団は、語るのではなく、語られるのである。こうした集団の中でも、農民は、分類対象＝階級対象の顕著な例をなしてい

る。つまり農民は、その定義からして、矛盾に満ちた期待の対象となっており、彼をめぐるてなされる対立した言説の中でしか存在し得ない。イデオロギー生産界の様々な領域が、農民に全く矛盾した彼のイメージを提示するのである。例えば、農民の徳や農村の美点をたたえる言説は、労働者や都会の欠点を語る際の婉曲的な表現となっているのである（ここにおいては、社会的カテゴリーと倫理のカテゴリーとが、紋切り形のかたちで同一化されている）⁽⁵⁾。ところが、事情がより複雑なのが、ブルデューの指摘するフォルクロー化という現象である。例えば方言について考えてみよう。一方で、経済・婚姻・学歴といった市場は、暗黙のうちに、農民に方言の放棄を要求するが、他方で、特定の知識人分派は方言への回帰を要求している。この場合彼らは、（他の支配的諸集団との区別立てという意味で）ディスタンス化戦略を行使し、そこから生じる差別的利益に与ることができると、こうした知識人の試みも支配の分業体制に組み込まれざるを得ない。つまりこうした戦略は、必然的に農民を、都会人のための風景へと変形された自然の管理人にしてしまい、農民的なるものを博物館へと追いやってしまうことになるからである。

以上が、「分類対象＝階級対象としての農民」という論文の要点である。しかし残念ながら、これだけでは、自己を定義する権力を奪われた階級が、いかにして自らを種別的な階級として、相対的に自律的なアイデンティティを持った集団として考えることができるのか、こうした論点については曖昧なままである。このような困難な課題を初めとして、ブルデューの弟子たちは、農村・農民研究の分野で、すでに多くの研究を蓄積している⁽⁶⁾。しかしこれらの研究についての検討は、残念ながら別の機会にゆづらざるを得ない。

最後になったが、ご多忙を極めるなか、ブルデュー氏からの翻訳の許可を仲介して下さ

り、また、テキスト中の多くの疑問点について快くご教示頂いた、加藤晴久教授（東京大学教養学部）に感謝したい。（本研究は、平成6年度科学技術庁重点基礎研究「農村における高齢者への医療介護支援システムの普及と需要に関する研究」の一環としてなされたものである。）

注(1) "Reproduction interdite-La dimension symbolique de la domination économique-", *Etudes Rurales*, No. 113-114, 1989.

(2) 拙稿「結婚市場と農民——P.ブルデューの所説に寄せて——」,『農業総合研究』第48巻第3号, 1994。

(3) DiMaggio, P., Mohr, J. "Cultural Capital, Educational Attainment, and Marital Selection", *American Journal of Sociology*, Vol. 90, No. 6, 1985. p. 1254.

(4) "Une classe-objet: la paysannerie", *Actes de la recherche en sciences sociales* No. 17-18, 1977, pp. 4-5. [classe-objet]というのは、訳しにくいタームであるが、[classe-sujet 階級主体]というマルクス主義理論の中心的テーマを踏まえているのであろう。

(5) 階級闘争の痕跡を抹消するために、真の国民的・文化的アイデンティティの担い手として、農民が称揚される際の仕方については、さしあたり以下を参照せよ。E.バリバル（拙訳）「人種主義と国民主義」（E.バリバル・I.ウォーラスティン著、若森章孝監訳「人種・階級・国民（仮題）」大村書店1995）。これに対し、同じく被支配的な階級でありながら、労働者は、その「人種の構成」や「文化的アイデンティティ」がいちばん怪しげな階級とされるのである。このような理由のために、農民の社会的定義をめぐる闘争が、政治に対し特権的な場を提供するのである。

(6) S.マレスカは、農民の「公式的なイメージ」が産出されるのは、農民・農村をめぐるジャーナリストの期待と、農民指導者による、模範的な農業者像を体現したいという関心との、これら二つの行為者の共同作業によるところが大きいという。ところが、農業ジャーナリストも、象徴的な利益をめぐる、イメージ市場で他のジャーナリストたちと闘争してい

るのである。残念ながら、ジャーナリズムのヒエラルキーの中で彼らの占める位置は、政治経済全般、文化等を扱うジャーナリストに比して、決して高いものではない、という。S.Maresca, "La représentation de la paysannerie", *Actes de la recherche en sciences sociales*, No. 38, 1981.

〔付 記〕

この解題を書き終えた後に、ブルデュー派の社会学者と、H.マンドゥラスやM.ジョリヴェ等の「農村社会研究者（リュラリスト）」との間で激しいやりとりがあったことを知った。ことのおこりは、INRA（国立農業研究所）の研究者である、C.グリニョンとF.ウェーバーが、H.マンドゥラスやM.ジョリヴェを中心とした、1945年以來の、CNRS（国立科学研究所）のCES（社会学研究センター）における農村研究のあり方を批判したことである（C. Grignon, F. Weber, "Sociologie et ruralisme, ou les séquelles d' une mauvaise rencontre", *Cahiers d' économie et sociologie rurales*, No. 29, 1993）。

彼らによれば、正しい専門化（当該学問の運動と進歩によって引き起こされたそれ）と素朴な専門化（政治的行動のために外部から課されたそれ）とを区別する必要があるという。また、ジョリヴェら「農村研究集団」の研究はモノグラフィー研究を中心としており、非常に異なった地域研究の単なる寄せ集めに終始し、現代世界への農民世界の適応、というテーマしか持っていない、という。外部で生まれた問題への農村社会学への統合が意味するのは、素材における理論的な考慮が、同時に、行政的な考慮でもあることである。彼らは、ジョリヴェらの編著になる著書『農村から環境へ』（Du Rural à l' Environnement, L' Harmattan, 1989）を取り上げて、農村問題（農業省に援助された）から環境問題（閣外大臣省等により援助された）への移行が、それを物語っている、と揶揄している。つまりお気に召すままの社会学は安直な社会学であり、このような社会学は社会学の自律的要求の一般的水準を下げてしまった、という。こうして、彼らは、農村研究集団と社会学との出会いは社会学にとって不幸であった、と結論する。

これに対するジョリヴェの、*Cahiers* 編集長宛の手紙は、「安直な社会学という表現に個人的に不快感をおぼえた。INRAのラベルのもとにこのような表現が活字となっているのに驚いた」というものであった（同誌no. 32, 1994）。グリニョンらの論文が、それだけでフランス農村社会学史の批判的検討となっているのに対し、ジョリヴェの手紙は残念ながら、学問的な反論という形はとっていない。

こうしたやりとりについて、筆者自身はコメントする能力を持ち合わせていない。ブルデューの農村研究は、「規則から戦略へ」というパラダイム転換をもたらしたといえるだろうが、それならば、マンドゥラスたちのそれは、どのような理論的貢献をおこなったのであろうか。農村研究集団の「ライフヒストリー」を詳細に後づけていた故田原音和氏が（『現代フランス農村社会学の潮流——研究集団の発展史をたどりつつ——』、村落社会研究会『村落社会研究 第13集』お茶の水書房、1977）、晩年には精力的にブルデュー社会学を紹介されていたということが示唆的ではないであろうか。ブルデューのもとで学んだ若い社会学者たちが、フランスの農村研究を活気づけていると思われるが、わが国においてこうした若い世代の農村研究者が育っているかどうかを考えてみるのも無益ではないかもしれない。

ビエール・ブルデュー著

『禁じられた再生産』

— 経済的支配の象徴的側面について —

(訳) 須 田 文 明

はじめに

1. 補遺と訂正
2. 「閉じた世界から無限の宇宙へ」

はじめに

非常に長い期間を経た後で、独身問題を再論して欲しい、という編集部からの提案は、私にとって魅力的であると同時に困惑させるものであった。というのも、私にとってこの古い論稿⁽¹⁾は、特別に愛着のあるものなのである。それは、最初の出発にありがちな心許なさをいたるところで表しているのだが、それでも、その後の私の研究の多くの主要な展開を導くような原則を含んでいるように思われるのである。例えば、ハビトゥスや戦略、象徴的支配という概念が想起される。これらの概念は、必ずしも完全に説明されているわけではないにしても、このテキスト全体を方向づけている。さらに、また、このテキストを貫いているものに、反省性(réflexivité)の試みがあり、それは素朴な形でではあれ、その結論において示されているのである。自惚れていると思われるのではないか、という気後れにとらわれなかったならば、反省性の試みによって、無意識裡に抑圧されていた社会的経験を再びわがものとしたことが、予備的な社会分析として、学問的あるいは「民衆的な」文化への接近(あらゆる出自の知識人が、通常、民衆や文化に関するすべてのものに対して行う場合よりも、回りくどくなく、歪めら

3. 結婚市場の統一化
4. 「良識的な見解」

れてもいないような接近)を可能とした、ということを示すことができたであろう。しかしながら、再び、完全にそれに没頭すべき意思も時間的余裕もなしに、かのファイルボックス(ピット・リバーズの好意に満ちた発意により、「農村研究」誌の論文の改訂増補の英語版のために、70年代初頭に私が執筆した断片と塊がこの中で非常に長い間眠っている)を再び開いてみたときには、ある種の不快感を感じないわけにはいかなかった。うち捨てられた、このがらくたの中で、今日なお妥当するものをいかにして拾い上げればよいのか(しかも、本号に集められている論稿を筆頭にして、多くの重要な仕事になされているというのに)。当初の論文をすっかり書き直すことをしないで(そうしようとは思っていたのだが)、私が意図していた修正と追加の基本的な原則をどのように伝えることができるであろうか。

1. 補遺と訂正

私は、私が古い社会における結婚にともなう交換 *échanges matrimoniaux* の論理を記述しようと努めていた最初の段階に立ち戻ろうとは思わない。「再生産戦略システムにおける結婚戦略」(*Annales* 4-5, juil. - oct. 1972: 1105 - 1127)と題された論稿は、婚姻にともなう交

換の論理に関して、それ以前の説明に代わるものと考えられている。この古い説明は、遺産相続人の独身という形で危機が最も顕著に示されるよりも以前に提起されたものである。つまり、この説明は親族構造と経済構造との間の物質的関係を理解するさいの支配的なやり方に対立していると考えられていたのではあるが、その分析は、結局のところ、彼らの特殊な「切り札」（財産の規模、出生順位など）から最大限の利益を引き出そうとするさいの「戦略」の実践的論理を等閑視したままなのである。一方で、（所有規模の大小によってとらえられた）経済「構造」と親族構造との関係を形式的な定式へと閉じこめようとする当初の試みと、他方での、結婚「戦略」を方向づけているすべての制約（ないし規定要因）の決定的な再構成とを比較することは、研究の具体的な細部において、構造主義的見方との断絶を考察する良い機会を提供してくれる。調査と考察の手法という点でも、また採用すべき言葉という点でも、構造主義的見方とのこうした断絶がなされなければならなかった。この断絶のために、実践の適切な理論を生産することができたし、また構造に客観的に適合されたハビトゥスの、意図的ではなくとも合理的な戦略の産出物として、行為者の配偶者「選択」を理解することができたのである⁽²⁾。理論的・方法論的進歩そのものは、対象に対する研究者の主体的態度の「転換」と切り放し得ない。客観主義的観察者のいささか傲慢な外在性は、実践に対する関係を理論的に再把握することによって可能となる（理論的・実践的）親密さへと席を譲るのである。結局のところ、構造主義的見方によって前提されていた構造に代わって、行為者とその戦略を中心な地位におく視点の採用が、ヨーロッパ的な農村共同体のような、民族学的な主要な伝統から、実際のところ長い間排除されてきたような社会についても適用されたとしても当然のことなので

ある。というのも、いったん社会的な距離が克服されるならば、あるポピュリスト的な神話が追求しているような行為者の実体験の経験への融合的な参与とも、また、ある人類学的伝統が敢えて方法論にまで練り上げた外在的客観化とも対立するような、実践への理論的な親密さを可能とするほどに、こうした社会は非常に近いものである。

既婚か独身かについての異なった機会の統計的分析については、正確を期するためには、もはや（1962年の論文におけるように）調査時点にルキールに居住している人数全体ではなく、当該の「コーホート」の総数（付録の表を参照—省略—）を母集団とみなして計算しなければならない。こうして、様々な属性（性や出生順位、父親の職業、家族における地位、居住地の位置——町bourgか僻村集落hameauか——）に応じて異なる離村率ならびに、こうした属性に応じた離村者あるいは村へ残った者の婚姻の機会を測定する手法を見いだすことができた。（離村者についての情報が、一連のインフォーマントのもとで口頭により集められなければならなかったために）完成するのに非常にやっかいで、長期間を要したこの統計は、実際、すでに得られている結論を精緻化し、またそれと一致しているのである。つまり、有効回答数の少なさのために慎重を期さねばならないが、以下のように主張することができる。とりわけ、村へ残ったもののうち、男性の方が圧倒的に多いような僻村集落においては、男性よりも女性のほうが離村機会が非常に高い。男性の場合、所有規模とともに土地に留まる機会が増える。全体としては、末子よりも長子におけるほうが、離村率は低い（61%対42%）。しかし、長子相続の効果は、小所有層ではそれほど強くない。娘の場合、離村と所有規模、あるいは出生順位との間に顕著な関係はみられない。良家の娘は、他の娘より僅かながら高い割合で、離村してさえいる。結婚機会につ

いては、他を総て等しいとすれば、残存者よりも離村者のほうが顕著に多く⁽³⁾、残存者の中では、僻村住民よりも町の住民のほうが高い⁽⁴⁾。しかし、最も重要なことは——当事者をスキャンダルとしてうちのめすのだが——、僻村においては、所有規模や出生順位、「長子」に応じて、結婚の機会が異なるものではないということ、いずれにしても、重要な財産の相続人が同じように独身に陥っているということである⁽⁵⁾。

実際のところ、離村と独身とはそれぞれ密接に関連しており（独身に留まる機会は、とりわけ僻村に留まるという事実によって顕著に強化されるという意味で）、また一連の同一の諸要因（性や職業的出自、またとりわけ農業者にとっては所有規模、出生順位、最後に、町あるいは僻村の住居）と密接に関連しているのである。多かれ少なかれ、お互い密接に関連した一連の要因と、離村の機会、また（若年時での）結婚の機会との関係の統計が示唆しているのは、社会空間の全体的変容の効果であり、より正確には「象徴財市場の統一化」の効果なのである。この市場統一化の効果は、かつての農民的生存様式への客観的（名門家族の長子のもとで最大である）、主観的（ハビトゥスと肉体的ヘクシスに刷り込まれている）結びつきに応じて、様々な行為者に別様に行使されるのである。結婚と離村という二つのケースにおいて、（孤立の開放とともに）支配的な都市的現実を中心とする社会的場の及ぼす「吸引力」と、ハビトゥスを構成する知覚・評価・行動カテゴリーに応じて社会的行為者がこの吸引力に対置させる慣性力との、いわば合力を測定することができるのである。社会的な場の統一——象徴財の市場、したがって結婚市場の統一はその一側面なのであるが——は、（輸送手段の改善や中等教育へのアクセスの普及などのように、様々な要因の効果のもとで）客観性において実現されると同時に、イメージ（表象）

においても実現される。（相続人の独身をその最も顕著な例とした、差異的な排除現象をもたらす）社会的な場の統一が客観性において実現されるのは、行為者の主観性において、また主観性を通じて、この統一がなされるからでしかないと言えよう。行為者は、彼ら自身の従属をもたらす過程に対し、強制的であると同時に自発的な承認を与えるのである。

2. 「閉じた世界から無限の宇宙へ」

アレクサンドル・コイレのすばらしい著作の表題をかりたのは、経済秩序のみならず、むしろとりわけ象徴秩序において、農民的（また、より一般的に農村的）世界の客観的・主観的開放にともなう諸過程のすべてを指摘しておきたかっただけからである。この世界の相対的自律性を保証し、また中央の諸価値への種別的形態の「抵抗」を可能としていた諸要因の有効性を、こうした過程が著しく削減したのである。そのなかで、最も重要なものを挙げるならば、自己消費へのアクセスという点で顕著な、とりわけ消費財市場への依存度の低さ（同類婚もその一側面である）、また鉄道や自動車といった輸送手段の貧困によってもたらされた地理的孤立がある。この地理的孤立のために、移動範囲が限られ、「ローカルな基盤を持った」社会的世界への閉鎖（経済的あるいは文化的な差異を越えた相互依存および相互に顔見知りの状態を押しつける）がなされたのである。とりわけ言語に関して、都市的規範に対する、穏健な抵抗に基づいた「文化的パティキュラリズム」を可能とし、また宗教や政治に関して、ある種の「自地域中心主義 localocentrisme」を可能としたのが、こうした客観的・主観的閉鎖なのであった。例えば、日常的な政治的選択は、ほとんどの場合、身近なコンテクストに照らして、つまり、ミクロコスモス内で

のヒエラルキーにおける地位（このマイクロコスモスが社会的なマクロコスモスとの間にスクリーンをかけ、前者が、全体として、後者の中で占めている位置を隠ぺいしている）に
応じて、なされたのである。（このように、
地域的ヒエラルキーの段階に応じて、人々はい
わば、掟に忠実な人であったり保守主義者
でなければならないのであり、「大」農民に
とっては、定期的に教会に訪れることやミサ
のワインを司祭に寄進することが、家の格や
社会的位階の問題となるのである）。換言す
れば、それ自身の社会的ヒエラルキーを持っ
た、すなわち、支配者と被支配者、「諸階級」
のコンフリクトを備えたこのマイクロコスモ
スが社会空間の中でどのような位置を占めて
いようと、農民が彼らの世界について抱く表
象や、彼らがそこで占めている地位について
の表象（イメージ）には殆ど影響を与えな
かったのである⁽⁶⁾。

経済財および象徴財の、それぞれの市場の
統一化がもたらす第一の帰結は、支配的価値
に対して、たんに「異なった」というだけで
はなく、少なくとも主観的に「対立するもの」
として自らを提示することができるような農
民的価値の存在条件を消失させたことである
（「民衆文化」についての混乱した議論をうま
く解明するには、エナンシオンとヘテロンと
いう古いプラトンの対立を指摘しておくだ
けで十分であろう）。限定的かつ隠ぺいされ
た従属に、深刻かつ知覚された、すなわち承
認された従属が急速にとって代わった。小農
業（ルキールの「大」農民でさえこの中に位
置づけられる）への市場経済の支配の強化の
論理と帰結については、しばしば論じられて
きた。生産についてみれば、農業経営はまず、
常に工業的な商品（機械や肥料など）の市場
に従属しており、また生産資材を近代化し、
収入を改善するために必要な投資を行うた
めには、農業経営の収支均衡を危うくする
ような借入金に依存せざるを得ず、また決め

たタイプの製品やその販路に経営を縛り付け
るような借入金に頼らざるを得ないのであ
る。販売については、農業経営はますます、
農産物市場、より正確には、食品工業（極端
なケースとして、牛乳の集荷までを手がける
食品工業）に従属せざるをえない。農家経営
の支出は、とりわけ工業的な財の価格の一般
的動向に依存するのであるが、それについて
は彼らは影響力をもちえないという事実、ま
た、とりわけ、彼らの収入はますます保証価
格（牛乳やタバコの価格にみられるように）
に依存しているという事実によって、かつて
は自然の偶然性からなる場所を、（現実にお
いても、世界観においても）価格の変動の偶
然性が占めるようになった。つまり公的権力
の経済的介入を通じて（とりわけ、価格のイン
デクセーションを通じて）、農民経済の疑似
自然的世界のなかに登場したのが、政治的
要因なのであった（もちろん、この要因は政
治的な反作用をも引き起こし得るのである）
⁽⁷⁾。こうした事情が、農民たちに対し、社会
的世界についての政治化された見方をもた
らしたのであるが、その反国家的な色合いは、
未だに、自己経営の基礎という自律性の幻想
に多くを負っているためなのである。疑似賃
労働者へと転換した小所有者が自らの存在
条件について抱く、二分された、したがって
矛盾に満ちた表象は、——それはしばしば、
反抗的であると同時に保守的でもある政治的
立場において表明されている——根本的に矛盾
した条件の客観的曖昧さの中にその基礎を持
っている。つまり、少なくとも一見したところ、
自らの活動を組織するさいの主人（市場
で自らの労働力を販売する労働者とは異な
り、彼が販売するのは「生産物」なのである）
ではあっても、また、非常に重要な投下資本
（しかし実際は、換金しにくいのであるが）
と考えられる生産手段（建物や施設）の所有
者ではあっても、彼らは、やっかいで労力を
要する、また（ますます資格を要するような

ものではあっても）象徴的にも報いられないような仕事から、有資格労働者よりも少ない収入しか受け取っていないのである。他方で、とりわけ補助金や信用に関するテクノクラートの政策の思わざる効果を通じて、様々な種類の投資によって、彼らは、実際のところいわば社会主義経済と同じように強度に社会化された生産を行うことになったのである。もちろんそれは、価格や生産過程そのものに影響を与えるような条件の下で行われたのであるが、こうした条件は、名目上の所有権と生産の責任、およびそれに由来する自己経営へと関連づけられたままなのである。

市場論理への農民経済のさらなる従属というだけでは、大量の離村を筆頭とする、農村世界で起こった深刻な変容を説明するのに十分ではない。農民の倫理的自律の侵食と、さらにそれによる彼らの抵抗と拒否の能力の衰退を説明できるような、象徴財市場の統一化に、（循環的な因果連関によって）こうした従属過程そのものが関連付けられなければならないのである。非常に一般的には、農外への流出は、農業および非農業部門における所得と、これらの部門における雇用供給（工業部門の失業率により測られる）との間の関数であるといわれている。こうして、農外流出についての単純な機械的モデルが提起されることになる。すなわち、一方では、経済状態（所得水準や失業率）の格差が大きければ大きいほど大きなポテンシャルを持つという、差異を伴った「吸収の場」が存在し、他方では、こうした場の力に対して、様々な要因に応じて異なる「慣性」ないし抵抗を行為者は対置させるというのである。

しかし、このようなモデルに十分満足できるとすれば、それは、決して機械的ではない、こうした機能の前提条件を忘却しているからである。例えば、農業と農外との所得格差の効果が働くのは、「関連付け」の意識的・無意識的行為としての「比較」が可能になり、

社会的に受け入れられる限りのことであり、またこの比較が都市的生活様式の利点に目を向けさせる限りのことである。すなわち、狭い限定的な世界が開示され、二つの世界の間のいかなる接近も考えられないものとしていた主観的スクリーンが急速に取り外されるようになる限りのことなのである。換言すれば、都市的生活の利点が存在し、効果を発揮するのは、それが承認され尊重される限りのことであり、したがって、知覚・評価カテゴリーによって理解され（認知されずに、無視されること——受動的にであれ、積極的にであれ——をやめ）、またこの利点が知覚され・尊重され、目に見えるものとなり、望ましいものとなる限りのことなのである。実際、都市的生活様式の魅力が行使されるのは、その魅力に改宗した人々に対してだけなのである。つまり、統一化の客観的過程へと向かっている社会的な場にたいして、（支配的諸価値に対する全面的な承認にもとづいた）象徴的権力を付与しているのが、世界観の「集合的改宗」なのである。

象徴革命は、個々の無数の改宗の蓄積された帰結であり、この改宗は、ある限界を越えると、それぞれますます急速な過程にのめり込んでゆくことになる。習慣による陳腐化が、結局、とりわけこの過程の初期段階において、村や家からの離別にとまなう莫大な心理的作業を忘却させるのである。さらに、準備段階、および決断を開始させるような機会を指摘しておかなければならないし、また（郵便配達や、パートタイムの運転手といった職業につくことが、都会への出発の跳躍台を提供することもあるが）常に実行し難く、あるいは（しかたなく移住した人々の場合にみられる、故郷に「近づく」ための生涯にわたる努力が示しているように）時として決して実現することのない、心理的離別の段階を指摘しておかなければならない。

それぞれの当事者は、自己確信から、いく

ぶん激しい動揺を経て、自己評価の危機（「農民」の終焉の儀式的な悲嘆：「農民なんて、もうダメだよ」）といった諸段階を、同時にないし順番に体験する。緩急に差はあれ、（農民的諸価値の転覆をもたらす）このような心理的軌跡をどのように辿るかは、古いヒエラルキーにおける位置に依存している（利害およびこの地位に結びついたディスポジションによって）。外からの吸引力に対し最も弱い抵抗しかたしない行為者は、流出にともなう利益を他の者よりも多く得るのであるが、彼らは、女性や末子、貧困者であるがゆえに、村や家に、客観的・主観的にそれほど愛着を持たない者でもある。村や家から離れる順序を決定するのもまた、古い秩序なのである。交換の象徴的対象として、低いところから高いところへ流通し、さらにこのために、都市からの影響や都市的魅惑に対し、積極的に従順な態度を自発的にとる傾向にある女性たちは、末子とならんで、都市的世界からのトロイの木馬となるのである。男性よりも（さらには末子さえよりも）、農民的条件に結びついておらず、労働にも、権力にも与ることなく、したがって「維持」すべき遺産の配慮にとらわれておらず、教育と、それが与える移動の約束とをより多く付与された女性達は、農民的の世界の中に、「農民的価値」を下落させ、剥奪する都市的眼差しを持ち込むのである。

こうして、個人的・集合的改宗をこうむった社会的世界の知覚の再構成は、集合的に持続した心理的自律の終焉と軌を一にしたものでしかない。このような自律は、家族的生存の閉じた閉鎖的世界を絶対的な参照基準としているのである。ところで、こうした基準はまったく異論のないものであったため、仕事や結婚のために村を捨てなければならなかった貧しい末子の選別的離別は、なお中心的な諸価値にたいする敬意であったし、そのようにみなされているのである⁽⁸⁾。ところが、ま

すます多くの流出をもたらし、残存者にさえ影響を及ぼすような集合的改宗は、コペルニクスの転換とも言うべきものと不可分である。すなわち、中心的で不変の場、つまりそれ自体不変であるような、かのヒエラルキーの源泉は、もはやより広範な空間における任意の一点にしか過ぎず、より悪いことには、劣った、被支配的な低い場にしか過ぎないのである。それ自体のヒエラルキー（例えば「大」農と「小」農との間の対立）を伴う農村コミュニティが、より広範な社会的空間の中に再定位され、この空間の中で農民は、総体として被支配的な地位を占めているのである。しかも、突然格下げされたこの世界においては、かつて最も高い位置を占めていた者でさえ、うまく必要な改宗（転換）および再改宗を図らなければ、象徴革命の犠牲になる。この革命は、戦略的観点からする古い秩序、すなわち、結婚市場に影響を与える。つまり、農業経営は経済環境の中におかれており、また自家労働力のみには依存せざるを得ないような労働市場の中におかれているので、結局、この結婚市場が、きわめて直接的に、農業労働力の再生産、したがって農民的経営の再生産を支配しているのである。

3. 結婚市場の統一化

具体的に価格を付けられるのが、社会的特徴を有する諸個人であるという点において、まったく特殊な市場として、結婚市場は、農民に対し、価値基準の変容、彼らに付与された社会的価格の下落を認めさせるきわめて劇的な機会を提供することになる。「現象的には」、全く異なった経験の対象にまで及んだ理論的構成の長期にわたる作業を経た後で考えてみるに、私の研究の出発点でもあったクリスマスのダンスパーティーが示していたものは、旧来の農民的秩序の危機をもたらすことになったあらゆる過程の範例的实现であっ

たように思えるのである⁽⁹⁾。

要するに、このダンス・パーティーは結婚市場の新たな論理の可視的形態をなしていたのである。結婚市場の自律的な、また自動調節的なメカニズム（その境界は農民的世界にまで広がってしまった）が、集団の規範と利害に従属した地域小市場の管理された交換に取って代わったのである。このような過程の結果、象徴交換の市場の統一化の最も特徴的（しかも劇的）な効果を、またこの領域における、地域市場から市場経済への移行にともなう変容を、具体的に「見させる」に至ったのである⁽¹⁰⁾。エンゲルスの言葉によれば、行為者は「自分自身の社会的相互作用の管理を失った」のである。すなわち、「無政府性」にも関わらず、また無政府性において、さらには無政府性を通じて、行為者に競争の論理が課されるのである⁽¹¹⁾。独身を宿命づけられた大遺産相続人は、競争の犠牲者なのであり、この競争は、今後、（伝統により、しばしば受け入れがたいような制約と管理によってこれまで保護されてきた）結婚市場を支配することになる。農民的生産様式・再生産様式のあらゆる産物、農民家族が提供し得るあらゆるもの（土地や農村生活、農民の存在そのもの、言語、衣服、立ち居振る舞い、態度、果てはその「身体」に至るまで）、これらのものの急速な価値下落をもたらすことで、市場の統一化は、（制約された市場の枠内において、農民に、集団の社会的再生産に必要な総ての女性を——社会的再生産にのみ必要な女性を——事実上、独占的に供給してきた）社会的メカニズムを侵食したのである。

他のあらゆる種類の交換におけるのと同様に、結婚についても、市場が存在しているからといって、取引が競争メカニズムにしか従わない、ということにはならない。実際、多くの制度的メカニズムが、集団に対し、交換の管理を保証しており、エンゲルスが「無政

府性」と呼ぶものの効果からこの集団を保護する傾向にあるのである。ところが、古典喜劇において、家庭のしがらみ・一族の利害(Raison d'Etat domestique)という要請から恋人達を開放する、という「リベラルな」モデルに自然発生的に共感を覚えているために、こうした無政府性については忘れがちなのである。同様に、古い結婚制度においては、結婚のイニシアチブは当事者ではなく、家族に帰せられ、また「いえ」や財産の価値と利害が、感情の幻想と偶然性を打ち負かす場合が多かったのである⁽¹²⁾。それは、家庭内教育の総てが、男の子に対し両親の指示に従うこと、農民に特徴的な知覚カテゴリーに応じて婚約者を品定めすることを予め規定していたから、なおさらのことである。つまり、「良き農民」は所有規模、および家族の威厳、さらに権威や能力、仕事への熱意といった個人的資質、これらと不可分に結びついた彼の家の家柄によって見分けられるのに対し、「農民の良き妻」は、何よりもまず、苦痛への忍耐力や彼女らに与えられた条件を受け入れる態度によって見分けられるというのである。「それ以外のこと」を知りようがなかったために、近隣の僻村集落や山岳地帯の娘達は、結婚が彼女らに約束する存在条件になじみやすい心構えにあったのである。すなわち、外側からの影響に対し相対的に閉ざされた地域に生まれ、成長したがゆえに、彼女らは、多様な基準に従って将来の配偶者を判断する機会をあまりもちえなかったのである。こうして、1914年以前には、ルキールの僻村集落の農民の結婚市場は、ボー川とオーロン川の間に挟まれた地域にまで拡大していた。これらの地域は、全体として、ルキールと同様に未だにきわめて農民的な小さな村と、高台や低い山岳地に散在する農家からなるコミュニケーションの、経済的にも社会的にも非常に均質的な地域である⁽¹³⁾。集団による交換の管理は、地理的距離と、とりわけ社会的距離において

測られる結婚市場の規模の制限に示されている。他の領域ほどには、結婚市場においては、農民の世界が全体的な自律性やアウトルキーを持っていなかったとしても（たとえ村を対象としているにすぎなくとも、民族学者は、農民の世界をアウトルキーと考えていた）、この世界が、きわめて制限され、社会的に均質な「適切な市場」の内部で、結婚にともなう交換のほとんど総てを保証することで、農民世界の再生産の管理を維持することができたのである。つまり、物質的生存条件の均質性、したがってハビトゥスの均質性が、結局、集団の基本的諸価値の存続を保証していたのである。

しかしながら、お互い同士を身内と感じられるような閉じた世界は、徐々に開放されている。ルキールの僻村のような、結婚の主要な範囲をなしている僻村集落においても、女性たちは自らの村や近隣の村よりも、ますます都会に目を向けるようになっていく。男性よりもいっそう、都会的モデルや理想に適應しやすいので、彼女らは農民と結婚することを嫌がるのである。しかも、農民自身が、彼女らが逃げ出すように仕向けるのである（「口を差し挟むのをやめようとしなさい」舅・姑の権威、とりわけ、父親が低い地位から高い地位へと結婚したために、権威を欠いているような場合には、特に老いた姑の伝統的専制が家を支配し続けようとする）。こうして、女性達は農民的世界の外側で結婚相手を見つける機会が多くなるのであるが、それは、まず何よりも、このシステムの論理そのものによって、低いところから高い所へと流通するのが女性だからである。こうして、農民の僻村と、町や都会との間の結婚にともなう交換が、一方通行でしかなくなるのである。村のダンス・パーティーにおけるように、その裕福さとその振る舞いによって、農民に対する圧倒的な優位を持った、都会の若者のプレゼンスが証明しているように、かつては管理さ

れ、殆ど保護されていた結婚市場が、その後、きわめて激しい、きわめて不平等な競争へと開かれていったのである。都会の人々が、（町や村、僻村集落といった）階層化された様々な結婚市場の間で選択できるのに対し、僻村の農民は、その領域と競争を、それ自身の内部へと、少なくとも象徴的には富裕なライバルによって囲いこまれるのである。僻村農民の通婚圏の最近における拡大は、結婚の自由度が増大したことを示すどころではなく、したがって、可能な結婚範囲の拡大とならんで、結婚機会の増大をもたらすような自由度が増したことを示しているのでもない。むしろ、こうした通婚圏の拡大は、とりわけ最も恵まれない人々が、彼らの姉妹とは逆に、市場開拓の地理的領域を（社会的な均質性という制約の中で——換言すれば、この均質性を維持するために——）拡大する必要性を示しているにすぎず、また、バスコヤガスコーニュの辺鄙な僻村へと彼らの期待を向ける必要性を示しているに過ぎないのである⁽¹⁴⁾。

とりわけ、それとは感じられないようなやり方で、社会秩序が転覆するときによく起こりがちなのだが、かつての支配者は、自分自身の衰退をもたらす。あるいは、彼らは、自らに零落することを禁じ、また適時に必要な修正を施すこと、つまり（最も恵まれない者がせっぱ詰まって行うような）絶望の戦略に訴えることを禁じるような高慢さにとらわれているかもしれない。良家の遺産相続人のケースがこれに当たり、彼らは自分と同じ地位の娘に対しむなしく結婚を試みるのだが、結局のところ、独身に留まるのである。また彼らは、取り巻かれ、ちやほやされていたために、「大」農家にとって結婚がまだ容易であった1950年代の転機を、見逃してしまったのである（彼らのうちの一人が語るところによると、「私が鼻であしらっていたような多くの娘が、今では自分にお似合いだ」という）。あるいは、彼らは、新たな事態に対して、自

らをとんちんかんに行動させるような古い原理を適用させているのかもしれない。息子のことを気にかけなければならないにもかかわらず、娘の結婚相手を探すのに夢中になっているような母親、さらには、奇跡として受け入れなければならないのに、不釣り合いの結婚として拒絶しているような母親（未だに多く存在している）が、こうした者達である。ハビトゥスが世界と同じ位相にあるときには、その対応はきわめて奇跡的に適合しているために、合理的計算の結果であると確信させることができるのであるが、ハビトゥスを産出した世界と異なった世界に直面して、ハビトゥスが空回りするとき（ハビトゥスがすでに適応していない世界に対してまでも、客観的構造——ハビトゥスはその産物である——の期待を投影させるのである）、この対応は、全くとんちんかんなものとなるのである。

おそらく、ハビトゥスと構造との間のズレ、およびそれに由来する行為の失敗は、批判的な反省と改宗の機会を提供する。しかし、危機は自動的に意識を覚醒させるわけではない。つまり、おそらく、古い世界への客観的・主観的愛着が強いほど、またこの古い世界が提供している賭金・利害への関わりと投資が多いほど、新たな事態を理解するのに必要な時間が長くなるのである。これこそ、まさに、しばしば特権を足かせへと逆転させているものなのである。実際、古い、あるいは新しいシステムと関連した利害に応じて、前進と後退を伴いながらも、様々な速度で、様々な行為者が、古い結婚体制から新しいそれへと至る軌跡をたどるのであるが、それは、新旧それぞれの体制に結びついた価値とイメージ・表象を修正することによってなのである。革命的危機の最も典型的な帰結（予防的予言において、つまり「農民なんて、もうダメだよ」というパターンで、悪魔払いの機能を持った予想の中で表明される）は、意識お

よび行為におけるこのような二重性であり、それは、次々に、あるいは同時に、新旧、二つの対立するシステムの矛盾した原理に従って行動するように仕向けるのである。

こうして、統計が示すところでは、農民の娘がしばしば非農民と結婚しているのに対し、農民の息子は（もし結婚するとして）、農民の娘と結婚しているのである。その矛盾そのものにおいて、こうした結婚戦略が明らかにしているのは次のことである。つまり、農民集団は、その息子にとって望むことをその娘には望まないということであり、いっそう悪いことには、結局、その息子にたいしその娘を望むとしても、その娘に対してその息子を望んでいない、ということである。妻を与えるか、受け取るかに応じてまったく対立した戦略に訴えることで、象徴的暴力（彼らはその対象であると同時に主体でもある）の効果のもと、農家のそれぞれが分断されているということ、農家家族は示しているのである。つまり、同類婚が評価基準の統一性、従って集団自身の調和を示しているのに対し、結婚戦略の二重性は、この集団が個人の価値、従って諸個人の集まりとしての自分自身の価値を評価するために採用する基準の二重性を明るみに出しているのである。インフレーションの過程を支配する論理に類似した論理にしたがって（あるいは、その極端な状態、すなわち「パニック」現象に類似した論理にしたがって）、それぞれの家族や行為者が、全体としての農民集団の価値下落（これ自体その結婚戦略の根底となる）をもたらすのである。総ての事態は、この集団が、自分たち自身の間で陰謀を企てているかのように進行しているのである。あたかも左手がしていることを右手が知らないかのように行為することで、農民集団は後継者の独身条件および離村の条件を作り出しているものであり、しかも、彼らはこの条件を社会的な災難として嘆いているのである。娘を都会の人に嫁がせ

ることで（というのも、この集団は低いところから高いところへと結婚するのが習慣となっているから）、意識的にであれ無意識的にであれ、彼らが、農民についての事実上、減価された価値という都市的表象にたいして責任を負っている、ということが明らかになるのである。農民についての都市的表象（常に明らかなものではあるが、抑圧されている）は、農民の意識にまで課されている。あらゆる象徴的な攻撃（これには統合的な学校による攻撃が含まれる）にも関わらず、またそれに対抗して、農民が守り抜いてきた「自己確信」が崩壊したことにより、この崩壊をもたらす揺さぶりの効果が倍增するのである。つまり結婚市場における交換の「無政府性」の中に見られるような「農民的諸価値」の危機が、物質的・象徴的な財市場において、農民的価値やその財産、その産物、その存在そのものの危機を増幅させるのである。個人のレベルで知覚された内的敗北感（市場の匿名的孤立性によって実現された、孤独な、裏切られたという感情の基礎にある）は、その集団的で無意識的な帰結、すなわち女性の離村と男子の独身をもたらすのである。

教育システムという都市的世界による象徴的支配の主要な道具に対する農民の態度の転換・改宗の基礎にあるのも、同じメカニズムである。経済市場および象徴市場がますます頻繁に要求する能力（フランス語の操作や経済計算の管理などのように）を唯一教え込むことができるのは、学校であると考えられるので、就学や学校的価値に対するこれまでの抵抗は消え失せてしまったのである⁽¹⁵⁾。学校の価値への従属は、学校がもたらす伝統的価値の没落を強化・加速させる。こうして、学校は象徴的支配の道具として機能することで、都市的象徴財にとっての新たな市場を開拓することになるのである。要するに、学校は、支配的文化を習得する手段を与えるに至らないとしても、少なくとも、この文化の正

統性の承認を教え込むことはできるし、またそれを習得するための手段を所有している者の正統性の承認を教え込むことができるのである。

就学率と農業者の未婚率を結び付けている関係（地域レベルで集計した）は、因果関係として読まれるべきではない。そのような解釈は、この関係の二つの項目が、同じ原理の産物であることを忘れているからに他ならない（たとえ、教育が、男子の独身をもたらすメカニズムの有効性を強化することになるとしても）⁽¹⁶⁾。経済市場および象徴市場のそれぞれの統一（教育システムへの従属の広がりはその一側面でしかない）は、すでにみたように、農民が社会構造においてその地位を位置づけるさいの参照システムを変容させる傾向にあるのである。すなわち、子供の就学や離村、方言の放棄、これらにおいて見られる農民の意気喪失の要因の一つは、地域的な社会関係をおおっていたスクリーンが消失したことである（このスクリーンが、社会空間における彼らの地位の真実を、彼らにたいして隠ぺいすることになったのである）。つまり農民が自らの状態を理解するのは、地方役人や労働者のそれとの比較においてなのである。この比較は、かつてのようには、もはや抽象的でも、幻想的でもない。家族そのものの内部における具体的な対立の中で、とりわけ離村者との間で、この比較はなされるのであり、現実の競争条件（このなかで、結婚に際して、農民は非農民と比較されるのである）の中でなされるのである。実際に、都会人を選好することで、女性達は、社会的階層化の支配的な基準を喚起してしまうのである。さらにこの基準に照らして、農民教育の産物、とりわけ女性に対する農民の態度は殆ど価値を持たない。農民は、都市的侮辱がその形容詞に与える意味で、「農民的」になるのである。階級間においても観察される人種主義の論理にしたがって、農民は絶えず、その実践

において、都会人が投げかける自分自身についてのイメージ・表象を考慮にいとるを得ないのである。つまり、たとえ「否認」という形においても、農民は、こうしたイメージに対して、都会人が彼らに行う価値下落を対抗させていることを承認せざるを得ないのである。

教育システムが、価値下落の循環的過程に加える加速度作用をわれわれはすぐさま見て取ることができる。まず第1に、教育システムは、それ自体として、方向転換させる力を持っている。つまり、学校自体は否定的な賞罰によって挫折させるに十分ではないとしても、家族が学校よりも土地に子供の投資を行うという強化戦略に打ち勝つには十分な力なのである。離農というこの作用は、教育的メッセージの利点そのものによってというよりも、勉学の経験および学生もどきとしての条件を媒介にして行使される。義務教育の延長と就学期間の長期化によって、実際のところ、農業者の子供は、「生徒」へとおかれたのであり、そのライフスタイルによって、とりわけその時間リズムによって農民社会から切断された「学生」の状態へとおかれたのである⁽¹⁷⁾。この新しい経験は、家族によって継承された諸価値を実際に下落させ、情動のおよび経済的投入をもはや、一族の再生産に向けてではなく、社会構造において血族によって占められている地位の、個人そのものによる再生産へと向けるのである。ここでもまた、とりわけ学校が娘に及ぼす作用を媒介にして、家族と農民的特性を再生産すべく運命づけられた農業者の息子に影響を与えるのである。離農という作用は、女子生徒においてとりわけ好都合な土壌を見いだしている。というのも、娘の熱望は結婚を考慮しながら形成され、そのために、彼女らは、都市の様式と振る舞いに注意深く、また敏感なのである。さらに、彼女らは、象徴財市場における潜在的な配偶者の価値を規定しているすべての社

会的指標にたいして敏感であり、従って、少なくとも学校教育から、都市的洗練の外的な現れを身につけようとする傾向があるのである。さらに、またもや、農民があたかも自らの客観的運命の共犯者であるように、彼らは彼らの娘をより長く就学させているということが、示唆的なのである⁽¹⁸⁾。

教育メカニズムは農業者を、彼らの生物学的・社会的再生産の手段から切断してしまうという結果をもたらすばかりでなく、農民の意識において、彼らの集合的将来について、壊滅的なイメージを生じさせる傾向にあるのである。農民の終焉を表明するような官僚的な予言は、日常的経験が彼らに与える多数の断片的な徴候に意味と一環性を与えることで、こうしたイメージを強化するだけなのである。階級の将来についての悲観的なイメージがもたらす意気喪失の効果は、それが指し示している階級の衰退をもたらすのである。ところで、諸階級間の経済的・政治的競合は「未来についての象徴的操作」を媒介して行われている。つまり、予想（「予言」の合理的な形態）は、それが予言する未来の到来を促すことができるのである。たとえ経済情報が、「当事者」自身に対し、小農業者や小職人、小商人を支配している市場の経済論理を明らかにし、広く開示するだけであるとしても、客観性と主観性との弁証法の結果、この情報は自らが述べる現象を成就してしまうのである。つまり、意気喪失とは、「自己実現的予言」の特殊形態でしかないのである。客観的決定論とその結果の予想との関係について、この意味で非常に重要な典型例を農民は提供しているのである。農民が自らの再生産を脅かすような行動をとるのは、自分達の客観的未来を、また支配的集団（彼らは自らの決定により、内面化させる力を持っているのだが）が抱いているイメージを内面化しているからなのである。

将来のイメージをめぐる闘争の賭金は、衰

退しつつある階級の、この衰退に対する態度以外のものではない。個人的離散の総和としての「敗走」をもたらす意気喪失であろうと、あるいは、危機の集合的解決の集合的 pursuit を導く「動員」であろうと、そうなのである。この両者の違いを作り出すのは、基本的には、次のような象徴的手段を手にし得るか否かなのである。すなわち、こうした手段によって、農民集団は、(現実的に、あるいはその懸念であろうと) 墮落すなわち反動的なルサンチマンへと逃げ込まず、また歴史を陰謀として表象することへと逃げ込まずに、危機を管理し、この危機に対し集合的な反抗を企てるべく自らを組織化することができるのである⁽¹⁹⁾。

4. 「良識的な見解」

いかに、純朴な社会学を信用してはならないかについて、すでに多くを語ってきたし、また、知的流行の一つのサイクルが終焉した今日、新たに流行している日常生活についてのあらゆる形態の「日常のおしゃべり」をこれまで以上に拒否してきたのだが、私は、以下のことを想起するのが正当であるように思う。すなわち、「直接の当事者」の絶望や憤慨が、研究者が無視したり回避している問題をしばしば提起しているのである。ポピュリストの言説が、農民の新たなエリートを宣揚していた 1960 年代頃に、農村家族の不安の中心をなしていたのが、後継者の独身という問題なのであった。実際のところ、農家家族の生物学的再生産が、伝統的な形態での、農業経営の機能の条件をなしている、という理論を受け入れるならば⁽²⁰⁾、結婚制度(再生産戦略の総てのシステムの鍵をなす)に影響を及ぼす危機は、農民の「いえ」の存在そのもの、従って財産および家族成員の不可分の統一性を脅かすことになる、ということがわからう。フランスの統計によれば、中規模所有層が、小規模所有層の衰退によってもたら

された土地のわずかな集積の最大の受益者であったし、また彼らは技術的にもまた組織や組合の領域でも最も近代적であったのであるが、こうした多数の中規模層が未婚に陥っていたのである。多くの土地を相続者なしとすることで、年長者の独身は、経済的支配の効果、従って少なくとも相対的な農業収入の低下の効果だけではなし得なかったことを実現したのである⁽²¹⁾。

これまでの分析を読んだ後で、結婚市場の統一化によって行使される象徴的支配が、農民家族の再生産の特殊な危機において決定的な役割を演じていると納得ならば、以下のことを承認しない訳にはいかないであろう。すなわち、実践の象徴的側面への注目は、上部構造という空気のような領域への観念論的逃亡を表しているのではなく、支配という現象の真の(あるいはこう言って良ければ、唯物論的な)理解の、必要不可欠の(もちろん象徴的側面だけではないが)条件をなしているのである。しかし、下部構造と上部構造との、あるいは経済と象徴との間の対立は、次のような対立の最も大ざっぱなものでしかない。すなわち、外的制約かそれとも自発的従属か、あるいは集権的操作かそれとも主意主義的な自己欺まんか、といった幻想的な二者択一へと権力の考察を閉じこめることで、こうした対立は象徴的暴力のきわめて微妙な論理を完全に把握することを妨げているのである。つまりこうした暴力は、社会化された身体と、それがおかれている社会的ゲームとの間の、自己自身にとって非常に曖昧な関係の中に基礎をおいているのである⁽²²⁾。

注(1) P. Bourdieu, "Celibat et condition paysanne", *Etudes Rurales*, No 5-6, 1962: 32-135.

(2) 人類学においては、科学的発見がしばしば、それが獲得されるやいなや、すぐさま自明なものとなる、という曖昧な特権を有している。またこの発見が要した苦勞の、結局のところ純粹に主観的な経験を示すことをしなくとも、

少なくとも教育的目的のためには、以下のような証明がもっとも良く、この発見の軌跡を証明してくれるであろう。つまり、この発見を得るために必要であった作業の足どり、あるいは、センセーショナルな自己批判よりも知的な転換の緩慢な歩み、これらをうまくわからせるような、一見したところ小さな修正や補遺が、こうした証明として最適なのである。さらにまた、同様に、この研究が開始された当初の問題設定と関連させて、この問題設定がたどった歴史的展開を示すことで、研究の動向の概観を与えることもできよう (P. Bourdieu, "De la règle aux stratégies", in Choses Dites, Paris, Ed. de Minuit, 1987. プルデュール「規則から戦略へ」, 『構造と実践』藤原書店, 所収)。「いつものことながら」, アングロ・サクソンの文献に限定した上で、戦略概念の登場と、その最近の普及を論じている、ある論文 (G. Crow, "The use of the concept of 'strategy' in recent sociological literature", *Sociology* 23-1, 1989, 1-24) に触れて、自分自身この領域で研究している D. H. モルガンが次のことを喚起しているのは注目値する。つまり、この概念の最初の使用と、それが民族学と社会学にもたらした新たな「パラダイム」は、家族と家族成員の社会学・歴史学の分野で現れた、というのである (D.H.Morgan, "Strategies and sociologists : a comment on Crow", *Sociology* 23-1, 1989: 25-29)。

- (3) 娘の場合は事情が異なる。つまり、農村に残る者は、離村した者 (24%) よりも僅かながら低い未婚率を示しているのである (全体で 18%, 町で 22%, 僻村集落では 17.5%)。このことは、彼女らが、それほど困難な市場にはさらされていないからである、とすると、理解できるであろう。
- (4) ルキールのカントンの、様々なコミュニティについての、1954・1962・1968 各年別に作成された一連の統計資料によれば、ルキールですでに観察された規則性がいたるところで観察されている。つまり、辺鄙で隔離された小コミュニティにおいては、また都市中心部からの距離、分散的な集落、さらにその職業構造によって、僻村集落と類似した小コミュニティにおいては、男子の未婚率の度合いはきわめて高いものであるが、しかし他方で、労働者

の町オロロンに近く、相対的に多くの労働者を含んでいるコミュニティにおけるそれは低下しているのである。

- (5) 年長者や後継者という概念は、生物学的な意味ではなく、社会的な意味でとらえられなければならない。伝統的な状態においては、社会的な決定の恣意性は欠如しているようである。つまり、この場合、ほとんど不可避免的に、生物学的年長者が社会的年長者、したがって後継者として扱われ、そのような者として行為するのである。ところが今日では、年長者の離村とともに、出生順位としての末子が、後継者の地位を与えられることがある。後継者とは、もはやたんに、彼が年長者であるからそこに残っている者のことなのではなく、彼が残っているから年長者であるような者のことなのである。
- (6) 中央の政治的な場には特徴的な、右翼と左翼といったカテゴリーは、マクロ・コスモスと地域的なミクロ・コスモス (もしここに、左翼・右翼というカテゴリーが存在するとして) とにおいて同一の意味を持ってはいない。農民の、より一般的に言って農村の人々の政治的立場の永続的な独自性は、ジャガイモの袋の比喻で、マルクスが指摘したように、地域的基礎に基づいた統一性の (少なくとも主観的な) 相対的自律性によって由来するドクサ不適合 (allodoxia) [訳注] のためなのであって、空間的分散のためなのではない。こうした不適合の効果は決して消失することはない、それを完全に理解するためには、農民的・農村的条件の特徴の総てを考慮しなければならない。しかしここでは、こうした条件について、以下の事実を指摘することしかできない。つまり、一つには、生産に特有な制約が、社会関係によるよりも、むしろ自然関係の形で現れているという事実である (生産のタイムスケジュールとリズムは、人間のあらゆる意志から独立した自然のリズムによってのみ規定されているように見える。また、経営の成功は、所有構造ならびに市場よりも、気候条件に依存しているように見える)。さらにまた、各人は絶えず他人の眼差しにさらされ、生涯彼らと共存せざるを得ないと感じているような閉ざされた世界の中で、他人の判断への全般的な従属が非常に特殊な形態を取っているという事実などである (集団の決定への従順な従属

や集団主義への屈服を正統化するために援用される「村にいる以上、しかたがない」という議論がそれである。

- (7) 政策担当者の目にさえ、価格政策は技術的正統化によってごまかされているのであるが、この政策は基本的に、政治的力関係における農民の地位に依存しており、また、費用はかかるが、別の意味では政治的に「安定した」、従って「儲かる」、(さらに、1980年代に発見されたように、農村においてその美学的な魅力を維持するために必要な)前資本主義的小農の存続が、支配的集団にもたらす利益に依存しているのである。もし、上方移動に飢え、人からの尊敬に敏感な都市の小ブルジョワジーが政治同盟のシステムにおいて、農民に取って代わることにならなかったとしたら、浪費を削減させるために、また、小規模農業によって実際に「歪められた」労働と資本を、工業の労働市場へと投入するために、離村を強化させたいという官僚的な意志が、これほどむき出しに表明されたであろうか。他方で農民は、今や暴力的であると同時に局地的なデモ(これは実際、他の社会勢力から孤立した形をとっており、このデモのなかにあらゆる矛盾が集約されている)へと排除されているのである。
- (8) 農民的価値の象徴的敗北は今日、非常に一般的なものとなっており、それを最も顕著に示す特徴的な例を挙げておこう。例えば、第二次大戦の直前に、ダンガンの「大相続人」の女性が、他の「大相続人」に対して表明した特権喪失の告発がある。「X氏は娘を労働者に嫁がせたのよ！」(実際のところは、「農工会館Maison du paysan」の従業員として働いている、サン・フォの小所有者であったのだが)と言っている。また、その一人娘が公務員と結婚した、アルビュの名門家族について、この御仁が宣った別の発言は、こうであった。「月給取りとなんて！」。
- (9) この例に関しては、通常「直感」と呼ばれているものを説明しなければならないであろう。問題を提起する具体的な光景は、真の「行動パラダイム」なのであり、このパラダイムは感覚的な形で、複合的な過程の総ての論理を凝縮しているのである。また、この光景の非常に重要な特徴が、対象へと肩入れした、従ってきわめて「バイアスのかかった」知覚

にしか明かされないということが重要なのである。「エスノメソドロジー」論者が言うように、この知覚は(痛ましい、犠牲者の状態や視点への同情に満ちた参加が示すように)愛情に満ちた共感と、情動的な色合いの総てをそなえているのである。

- (10) インフォーマントは、結婚を成就させるような関係のきっかけについて二つの様式を対比させている。すなわち、一方では、しばしば古いつながりに基づいた、家族間の交渉であり、他方では直接的な接触がある。後者の機会、ほとんど常にダンス・パーティーである。このように、家族的圧力と、あらゆる経済的・道徳的(娘の「風評」)配慮から解放された、当事者同士の直接的相互行為にもとづく自由交際は、孤立した個人の市場法則への従属を代償とするのである。
- (11) 「孤立した市場」と「市場経済」、より正確には、「規制された経済」と「自動調整された経済」との間でボランニーが行った区別は、「社会化された生産」の「無政府性」というマルクス主義的分析を精緻化するものである(K.ボランニー「大転換」)。すなわち、この生産においては「生産物が生産者を統治している」のである。つまり、集団が交換メカニズムの管理を保持している限り、ある市場が存在しているというだけでは、市場経済を作り出すのに十分ではないのである。
- (12) 旧来の結婚制度の最も特徴的な制度は、明らかに、半制度化された、あるいは自発的な仲人(trachurとかtalameと呼ばれる)であった。常に非常に顕著な、両性間の分断が、多分、実際のところ、とりわけ僻村において、共同作業のような伝統的な社会的つながりを弛緩させ、男女交際の伝統的な機会を減じさせるだけであるような世界においては、新たな結婚制度の「レッセ・フェール」は、都会人の利益を強化させることにしかならないのである。
- (13) ルキールの別の区域は、共通の地域に、共通の市場と共通の祭という特別のつながりによって結ばれた独自の領域を持っていたし、あるいは、より正確には、同じバス(様々な区画の住民を様々な方向に連れて行き、利用者間の接触の機会を与えた)の利用という条件によって結ばれた独自の領域を持っていた。
- (14) 社会的に異なった諸社会における婚姻交換

について、一般理論をここで提起しようなどとするのではなく、以下のことを示唆するだけにとどめたい。結婚市場の「統一化」の過程と述べたからといって、統一された結婚市場について同意しているのではない。後者の結婚市場は、「配偶者選択」のありふれた理論の中で、暗黙の内に前提されており、また、この結婚市場は、同類婚の機能の同質性を定式化することで（それが特権階級のものかそれとも被支配者のものかで、異なった意味を持つことを理解せずに）、常識的直感にしたがって、同類への吸引（「類は友を呼ぶ」）、すなわち、同類婚の追求を、同類婚の、普遍的ではあるが空虚な原理と考えてしまうのである。しかしながら、（例えば、やっとのことで機能し続けている「農民」市場のような）様々な結婚市場を、あらゆる依存関係を免れた複数の分断された世界として扱うような逆転した幻想に与するわけにもいかない。様々な労働市場に特徴的に働いている構造的法則を研究するためには、単一の統一された労働市場という仮説を放棄し、不均質なデータを人工的に総計するのを断念するという条件のもとでしか、地域や部門、職業に応じた賃金格差を説明することができない。それと同じように、次のような条件のもとでしか、様々な社会カテゴリーの結婚の機会にみられる格差、したがって彼らの教育の成果に付けられた価格を理解できないのである。すなわち、階層化された様々な市場が存在することを理解し、「適齢期の人々」の様々なカテゴリーに付けられた価格は、彼らが有している様々な市場へのアクセスの機会と希少性、従ってこの市場における彼ら自身のものである（また彼らがそれに対して交換されるべき、結婚に関わる財の物質的象徴的な価値に照らして測られる）価値に依存していることを理解するという条件がそれである。最も恩恵を受けている集団が、結婚の地理的範囲と社会的範囲を拡大できるのに対して（ただし、不釣り合いな結婚にならない範囲で）、最も不利な地位におかれた集団は、自らの配偶者を探す社会的範囲の社会的制約を相殺すべく、地理的範囲を拡大せざるを得ないのである。1966年にパロニーのエスパロで最初に組織された「独身者見本市」が理解できるのは、こうした論理、つまり絶望戦略の論理においてなのである。

(15) 象徴交換の市場のなかでの方言の流通の著しい減少は、農民教育の総ての成果に影響を及ぼす価値下落の特殊ケースでしかない。つまり、この市場の統一化は、こうしたあらゆる成果や立ち居振る舞い、対象、身なりによって決定的であった。すなわちこれらは、老人と俗物のものであるとされ、あるいは、フォルクローアの化石化された状態で、地方の碩学によって人工的に保存されているのである。農民は、民俗博物館や民衆の伝統の博物館へと送られ、あるいは、彼らが歴史という舞台から退場する場合には、剥製にされた農民の保護地としての、この種の博物館（生態学博物館がそうである）へと送られるのである。

(16) 農業者の結婚戦略を規定している説明要因の体系を、地域の段階で、把握するのはほとんど不可能である。地域においても、農業経営は多種多様であるので、経営規模と同時に、家族のライフサイクル、子供の数、子供の男女の割合、それぞれの学歴などを考慮しなければならないのである。例えば、25歳の息子を持ち、20 haの農地を持つ農業経営者は、息子に農地を譲るからといって、50歳で引退するなどということはできないであろう（もし、そうできれば息子はこの農地を取得したであろうに）。もし、この経営主がより広大な農地を持っていれば、彼はさしあたりこれを二つに分割できるであろう。また、もし、彼の息子との年齢差がもっと大きければ、彼は、60歳になってから、息子に農地を譲ることができるであろう。

(17) 農業者の子弟がより長く教育システムに留まるほど、彼らはより多く、農業経営を拒否する傾向にある。農業者の子弟のうち、中等・高等の技術教育ないし普通教育を受けた者は、初等教育ないし農業教育しか受けなかった者に比べて、より多く、農業から離れる傾向がある。彼らは明示的に、あるいは暗示的に、非農業へと進む準備ができており、あるいは、都市的環境で生活する準備ができていたことその他に、経営面積と資本の一定水準が確保されていないほど、就農することにより、いっそう多く不利な状況を被るのである。結局、彼らは、非農業の雇用機会について熟知しており、より多くの収入が得られそうな地域へと移動する傾向があるのである（P.Dauce, G.Jegouzo, Y.Lambert, La

formation des enfants d' agriculteurs et leur orientation hors de l' agriculture. Resultats d' une enquête exploratoire en Ile-et-Vilaine, Rennes, INRA, 1971 を参照せよ)。

- (18) 1962 年に、農業経営者の娘 (15 ~ 19 歳) の 41.1 % が就学していたのに対し、男子のそれは 32 % でしかなかった (M. Praderie, "Heritage social et chances d' ascension", in Darras, Le partage des benefices, Ed. de Minuit, 1966, p. 348)。男子の就学率と女子のそれが、10 ~ 14 歳層と 20 ~ 24 歳層については非常に近いものではあるとしても、15 ~ 19 歳層の娘、とりわけその父が 10 ha 以上の経営を行っている娘は、男子より非常に多く就学しているのである ("Environnement économique des exploitations agricoles francaises", Statistiques agricole 86, oct. 1971, pp. 155 - 166 (Supplément, ser. Etudes))。

- (19) 一般的に、保守的反抗的反動的な暴力へと至る、経済的疎外は、同時に、政治的な疎外でもある。すなわち、衰退にある行為者は人種主義、ないしより一般的に、誤った具体化へと向かうのである (つまり、スケープ・ゴートとされた集団 — ユダヤ人やイエズス会、フリーメーソン、共産黨員など — に彼らの現実のあるいは潜在的な困難の原因を付与するような具体化である。というのも、彼らは、こうした状態を彼らに理解させ、個人的な策略のパニックへと閉じ込められずに、これを改善するべく、自らを「集会的に動員させる」ような、そのような説明図式を手に入れているのである)。特定の場合において、確かに、地域主義者やナショナリストの要求は、市場の統一化に由来する象徴的支配に対して、特別な、道理にかなった反撃をなしている。こうした反撃は様々なかたちの経済主義と対立しているのである。というのも、経済と合理性についての限定的な定義のために (つまり、このようなものとして、「象徴財の経済」について理解できない定義のために)、経済主義は、まさに象徴的な要求 — 方言主義的、地域主義的、あるいはナショナリスト的な運動の中に、これらの要求は、常に、多かれ少なかれ混然と混じり合っている — を、情動や感情の愚かしさに還元してしまうのである (例えば、アイルランドのカトリックの要求に対する R. Cartier の典型的な表明を参照せよ。「これ

ほど愚かなことはない。いずれか一方の退去は経済的災難を意味するであろうに。残念なことに、世界を導いているのは利害でないのだ。世界は情動に導かれているのだ」。Paris-Match, 21, aout, 1971)。ところが、実際のところ、愚かなのは、また、人間行動の 4 分の 3 を愚かさとして判定しているのは、情動と利害との古典的な対比である。この対比のために、方言を巡る闘争やフェミニズムの特定の要求 — 「彼または彼女」という、アングロ・サクソンの、大学人の新しい言葉の言い替えのように —、あるいはある種のかたちの地域主義的要求といった、外見上まったく「情動的な」行為を、象徴的なレベルで正当に根拠づけるような、象徴的利害の明らかな存在を忘却してしまうのである。

- (20) A. V. Chayanov on the Theory of Peasant Economy, D. Thorner, B. Kerblay, 1966 (とりわけ Cahiers du Monde russe et soviétique V(4) 1964 の Kerblay の「はじめに」を参照せよ)。

- (21) 農業経営の消滅の諸要因をめぐる研究の結果、A. ブランは、「農業経営者の『退出』は、本質的には、死亡と引退の結果である」と結論している ("Perspectives sur le remplacement des chefs d' exploitation agricole d' apres l' enquête au 1 / 10 e de 1963", Statistique agricole, Supplément 28, juil. 1976)。1968 年に、ルキールでは、農業者の 50 % は 45 歳以上であり、その半分以上は独身であった。農民人口は、独身と晩婚に由来する出生率の減少の結果、純減を示していた。1989 年には、1960 年代の危機に直接見まわれた世代がその引退に達しており、土地所有者の非常に多くの部分がその所有地とともに消失しつつある。

- (22) 学者的実践が、自らが、差異の追求以外の原理を持ち合わせていないと分らせることができるからといって、私が行った分析にたいする競合するすべての理論をレビューするような学者的な実践を私はまったく好まない。しかしそれでも、私は次のような違いを指摘しておきたい。すなわち、客観的構造に対する、主観的構造の無意識的適合に基づいた、否認としての象徴的暴力の理論と、他方での、ディシプリンおよび訓練としての支配というフーコー的理論との違い、さらに、別の分脈では、開かれた、毛細血管のようなネットワーク

ークというメタファーと、他方での場の概念
といったものとの違いである。

[訳 注]

allodoxiaを、とりあえず「ドクサ不適合」と訳しておいた。聞き慣れないタームであるが、ブルデューの議論を精力的にドイツで紹介しているミュラーによれば、それは次のようなものであるという。つまり、よく知られているように、ドクサとは、日常的な思考・知覚・判断図式を示しており、それは社会的に規定された社会（集団間）の境界を、あたかも自然発生的なものであるかのように思わせる。これに対しallodoxiaとは、ある問題状況（この状況については特別の知識が必要であるにもかかわらず、それを持ち合わせていない）への態度を取らねばならないときに、自ら慣れ親しんだドクサにもとづいた対応を取ると、それは、とんちんかんなものになってしまう。このように、自分の自然な生活世界にとって疎遠なコンテキストにたいして、ドクサに執着しそれを適用させることが、allodoxiaなのである。Hans - Peter Müller, Sozialstruktur und Lebensstile, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1992. pp. 304 - 305.